

論文審査の結果の要旨

氏名：高橋清隆

博士の専攻分野の名称：博士(総合社会文化)

論文題名：C. S. ルイスにおける神学的言説の諸相

審査委員：(主査) 教授 竹野一雄

(副査) 教授 松岡直美

教授 石浜弘道

1. 本論文の目的

本論文は、C. S. ルイス(Clive Staples Lewis, 1898-1963)の著作の中に見られる彼の神学的言説に照準を合わせ、それらを詳細に検証し、組織立てることにより、ルイスが生まれる前から厳然として存在してきた、「生一本のキリスト教」を弁証してきたことを論証し、それとともに彼の著作総体が人々を神へと導くことを企図していることを明らかにすることが目的である。

2. 本論文の構成 (各章の見出しのみ記載)

序章 研究の意義とその目的、研究方法

第2章 ルイスのキリスト教再受容までの軌跡

第3章 ルイスの有神論

第4章 ルイスの聖書論

第5章 ルイスの三位一体論

第6章 ルイスの教会論

第7章 ルイスの人間論

第8章 ルイスの救済論

結論

資料

引用文献一覧

3. 本論文の概要

序論では研究の動機、テーマ選定の理由、目的、研究の方法等、研究の意義について提示している。

第一章は先行研究の総括である。第二章以降から、ルイスの神学的言説の諸相が具体的に検証されることになるが、各章において聖書や神学者たちの見解とルイスが考えるキリスト教弁証とを比較考察することによりルイスのキリスト教理解が「生一本のキリスト教」に依拠しつつも、ルイス独自の神学の特徴を浮き彫りにしていると明言する。

第二章はルイスのキリスト教受容と弁証についての簡明な記述である。第一節ではルイスのキリスト教受容までの過程を取り上げて、それに大きな影響を与えた要因の一つに幼い時からの読書の習慣に伴う本の選択があること、ルイスはキリスト教棄教後まもなくして偶然に G.マクドナルドの『ファンタステス』を読み、神聖さを感じたこと、偶然文芸雑誌を読んでいたところに北欧神話の挿絵に目がとまり大きな衝撃を受けた驚異体験(憧れ)のことなどに言及している。第二節はキリスト教弁証に関してのルイスの考えを分析している。ルイスは英国教会内に見られる「生一本のキリスト教」と相反する自由主義的キリスト教、モダニスト神学と聖書批評に従事するある種の人々、ファンダメンタリスト、的外れのキリスト教を痛烈に批判するが、ルイスのキリスト教弁証に際してはそれを踏まえるべきであると主張する。また、高橋氏はキリスト教弁証に際してのルイスの「憧れ」を別世界の消息を告げるもの、究極的實在の確かな徴と定義し、ルイスは、神や天国という「目的」と、「憧れ」を「目的」に導く「手段」と見ることにより、キリスト教弁証を実践したとの見解を示し、以下に続く各章においてそれがどのように行われるかに注目することにより、ルイス神学の真髄を探り当てることができると主張する。

第三章はルイスの有神論の分析である。第一節で啓示を定義した後、神学者たちが啓示を一般啓示と特別啓示の二種類に分類して説明していることを見る。その後、その分類法に倣い、ルイスの啓示観を検証

する。一般啓示において神は「自然」を用いて自分自身を顕わすが、高橋氏はルイスが自然から神性を抜き取るにより神に導く道具あるいは手段とすることにより自然を用いて神を啓示すると解する。第二節は神の存在証明と題し、目的論的証明、宇宙論的証明、存在論的証明、道徳論的証明の四項目に分けて。論じてのち、高橋氏はルイスの証明方法へと移行するが、特に目的論的証明において、ルイスは 1.神話、2.憧れを用いて証明していることが独特であると述べ、「憧れ」という「手段」を用いて「目的」である天国に導く、というルイス神学をここで見るできると主張する。第三節は非キリスト教的世界観と題し、無神論、汎神論、二元論、理神論の四項目に分けて論駁する。なお、ルイスは汎神論論駁において「合一」という概念を用いて、ルイス神学の特質を探ろうとする。

第四章はルイスの聖書論に関する論述である。他の神学者たちと同様に、ルイスは聖書が神の靈感を受けたものであることを認めるが、疑問を呈する個所もあるとし、聖書は科学的、歴史的に無謬でないとルイスは考えていたと高橋氏は指摘する。しかし、ルイスが神話をそこに絡ませ、創造説話を含む「神話が神により高められた」と言うとき、彼は創造の教理を支持し、神話が聖書にある理由は、神話が聖書の真理の相似形であるからであるとする。神話が神との相似形と言うルイスの考え方は神話を導き手、つまり、「手段」とし、「目的」である真実なもの、つまり神へと導いてくれるとも考えられると述べ、神の靈感も聖書の書き手だけでなく異教徒の神話の作り手にも及ぶとの考えは、死んで甦る神の神話が、ニカイア信条や使徒信条にある、昔からキリスト者が真理と考える「キリストの受肉、死、復活」を強力に支持すると分析主張する。このことは神話が「生一本のキリスト教」を伝えることに寄与していることの証左となると解する。それゆえに、高橋氏は、ルイスはキリスト者の基本的な信条であるアタナシオス信条の一説を引き合いに出し、受肉によって人の命は神の命の器となるのと同様、文学が神の言葉の器として用いられると言っていると高橋氏は指摘する。この見解はカトリックの聖書観と一致していると解することができること、聖書の文学形態、特に詩的形態についての考察により、ルイスが詩的形態を通して聖書の意味を悟りながら読むことを勧めたことは『日本基督教団信仰告白・十戒・主の祈りを学ぶ』にある、「聖霊の導きを求め、福音の真理を悟るように読むこと」と一致したと見るにより、聖書の読み方に関しても、ルイスの意見は古くからあるキリスト教の基本信条にしっかりと根ざしていると高橋氏は言明する。

第五章はルイスの三位一体論について記述である。高橋氏は、まず三位一体の教義について説明した後、神論、キリスト論、聖霊論へと移行する。神論においては、ルイスは神の特質である神の愛について注目する。ルイスは人間の愛と神の愛を比較し、神の愛の特質が勝っていることを説明するのであるが、人間の愛を神の愛の相似形とすると、人間の愛を「手段」とし、それを吟味することで「目的」である神の愛を知る、ひいては神との「合一」に近づく一つの手立てとなると主張する。キリストでは、キリストの一つの人格に神性と人性の二性が同時にあり、それぞれ完全である、という教義であるが、それを我々が理解するのは困難である。かつてルイスがキリストの人性を理解するのに役立った「生一本のキリスト教」の概念を巧みに用いて説明するが、我々にその説明が役立たなければ無視してもかまわないと言う。このことは、ルイスにとって有用な方法であってもそれはただの手段であるので「目的」に導くことができなければその手段に固執しない、ということルイス自身が言明していることになる。このことは、ルイスにとって重要なのは「目的」である神であり、それに導く「手段」ではないことの証左であると高橋氏は見ている。

聖霊論では父なる神と子なる神がともにいることにより聖霊が生じ相互的な愛の「合一」を見たとする。そこに人間も加わり合一するようルイスは勧める。ここにもルイス神学を見ることができると高橋氏は主張する。

第六章はルイスの教会論についての分析である。カトリック、プロテスタント、聖公会の各教派の教会の定義を見た後、高橋氏はルイスの教会論を検証する。ルイスは教会を「小さなキリスト」、「キリストの体」、「キリストの花嫁」と見なし、教会を通して我々人間がキリストと「合一」することが教会の唯一の目的であると言う。教会を「キリストの体」と見なすことは、キリスト教各教派も同意していることである。つまりここでもルイスは、ルイスの好むと好まざるとにかかわらず昔から厳然と存在している「生一本のキリスト教」の考えを用いて、ルイス神学の特徴である神との「合一」を強調していると分析している。

第七章はルイスの人間論に関する分析である。高橋氏は、人間論におけるルイス神学の特徴は特に自由意志に表れるとし、ルイスは神が人間に自由意志を与えた理由を、愛や善や喜びを可能にする唯一のもの

だからであり、自由意志を用いて神と結びつくことが最高度の幸福であるとする述べ、ここにもルイス神学の特徴である神との「合一」を見ることができると強調する。

第八章はルイスの救済論である。特にこの章ではルイス神学の特徴が色濃く表れているとし、まず、ルイスの憧れの定義を再度確認する。その後、地獄論、煉獄論、天国論を『天国と地獄の離婚』から分析する。地獄論においては、地獄を選ぶ者たちの特徴の一つに、「目的」ではなく「手段」に固執することを、『天国と地獄の離婚』のエピソードに託して、それをルイスが我々に与える警告であると受け止める。煉獄論では、煉獄での浄化を、自我を捨てることに伴う「痛み」とルイスが捉えているとし、それを「歯医者」の例え、つまり、歯科医によって治癒され、治療のため血で汚れた口内を水ですすいで清潔にするがごとく、死者の罪を洗う浄めの場所として巧みに煉獄を説明していると分析する。それを『天国と地獄の離婚』では、「赤いトカゲを肩に乗せた男の亡者」のエピソードを通して我々に提示しているとする。その理由を、赤いトカゲを男の自我と見なすとき、天国に入るためにはトカゲが死ななければならない、つまり自我を放棄し、それに伴う痛みを経験しなければならないからであるとする。天国論では、ルイスの天国の定義を、自己の所有を放棄し社会性を持つ都市として神から個人的に祝福される場所とし、天国での神の目的を、人間が再び神に「合一」されるように、可能な限りの個別性を所有することであるとしている見ることにより、ここにもルイス神学の一端を見ることができると主張する。また、それを可能にする特質を『天国と地獄の離婚』のセアラ・スミスのエピソードを通して自己放棄であると分析する。

結論において、ルイスの宗教的著作、ファンタジー、小説を丹念に読み解いて、ルイスの神学的言説を拾い集め、組織的神学として提示した結果、終始一貫して流れているルイス神学の柱の一端を担うものは「手段」—「目的」—「合一」である、と結論する。また、ルイスは、三位一体、キリストの人性などに代表される困難な教理にも勇敢に立ち向かい、彼なりの解決策を図っていることや、ルイスの提示した天国論が時を隔てて違う形で表れいまだ解決策を見ていないことから、ルイスの学問に取り組む姿勢や、提示した神学には大きな社会的意義があるとしている。

4. 本論文の問題点

①本論文は、ルイスのキリスト教弁証家としての側面に重点があるためか、ルイスのファンタジー作品である『ナルニア国年代記物語』への言及が少な過ぎる。なぜなら『ナルニア国年代記物語』にはルイスの神学的言説が明示的、暗示的に信仰と想像力の融合によって織りなされた物語世界の中に豊かに含まれているからである。本論文では救済論を提示するに際し『さいごの戦い』からの引用が見られるが、キリスト教終末論についての重要な神学的言説としても『さいごの戦い』を活用して終末論の章を本文中に入れ込むことができれば画竜点睛となるであろうし、また、キリスト論においては『ライオンと魔女』からの引用を付加すべきであろう。

②ルイスのキリスト教弁証家としての先行研究は海外において先行し、今もなお多くの文献が出版されている。本論文において外国文献の先行研究を分析し引用してはいるが、最近の先行研究からの引用は的確ではあるが、数冊の文献に限定されており、文献の参照バランスがやや欠けている。

③天使論、悪魔論についての考察も入れるべきではなかったか。

④ルイスの著作からの引用と筆者の見解が混在しているところが見て取れる。

⑤ルイスがカントの業績を知りながら、なぜ神の存在証明を行ったのかその理由を述べるべきである。

5. 本論文の意義と成果

日本において多くの読者が知っているルイスの代表的な作品は『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-1956)であると思われるが、それは20世紀を代表するファンタジー文学であり、今もなお多くの人々に読まれている。その主たる理由は、物語に込められた作者の世界観に基づくヴィジョンの提示にあると考えられるが、その基礎となるものが、彼が受容した〈生一本のキリスト教〉(mere Christianity)である。そして、その信仰が物語の主題に直接的あるいは間接的に関連している。そのため、ファンタジー作品を通して、ルイスのキリスト教弁証家としての側面を探究した先行研究は見られるが、ルイスの信仰論に焦点をあてた詳細な研究は日本国内においてはほとんど見られない。この事実はルイスの神学的言説が重要ではないということを含意しているのではなく、組織神学という切り口にあまり注目することが

なかったということが要因であろう。本研究はルイスの著作にちりばめられている神学的諸見解を拾い集め、それらを詳細に検証し、組織立てることによって、日本におけるルイス研究を一步進めることに貢献するだけでなく日本人のキリスト教理解に対しても新たな視座を提示できるであろう。

本論文の第一の成果は、ルイスの神学的著作、小説、自伝及び『ナルニア国年代記物語』に代表されるファンタジー作品を綿密に分析し、そこにちりばめられている神学的見解を丹念に拾い集めルイスの考えを神学的に組織立てたことである。ルイスは組織神学を企てなかったが、高橋氏は、ルイスの神学的著作の多さや、その述べられている神学的言説の豊富さや深さから、それを一つにまとめ組織神学として提示できると見て取り、神学的言説を地道に拾い集める作業を行い、分析し、検証し、最終的に体系的に提示した。この成果により、ルイスの神学の新たな鳥瞰図を見ることができ、ひいてはキリスト教神学の発展に寄与し得る情報を準備したと言える。

第二の成果は、第一の成果と関連するが、ルイスを神学者たちと比較することにより、ルイスがユニークな仕方で彼が生まれるまえから厳然としてある「生一本のキリスト教」を擁護したことを浮き彫りにしたことである。ルイスは聖書論にて神話を用い、独特な形で説明するが、死んで甦る神の神話を、ニカイア信条や使徒信条にある、昔からキリスト者が真理と考える「キリストの受肉、死、復活」を強力に支持すると見るとき、昔からあるキリスト教信条に依拠している、換言すれば「生一本のキリスト教」に依拠しながら論を展開していることを明示し得た。

第三の成果としてあげるべきは、ルイス神学の核心を指摘したことである。それを各章において強調している。まず、二章においては「憧れ」の概念を「目的」に導く「手段」としたこと、第三章では、目的論的証明の項目で「神話」、「憧れ」を「手段」と見なし、「目的」である神に導くとしたこと、また、ルイスは汎神論論駁において「合一」の概念を用いたこと、第四章では「神話」を聖書の真理の相似形とすることにより、神に導く「手段」と見なしたこと、第五章では、難解な三位一体を説明する例えを「手段」と見なし、神を理解する導きとしたこと、第六章では教会を「キリストの体」とするとき、人間がキリストの体の一部、つまり「合一」することを神の目的とすること、第七章では、人間が自由意志を用いて神と「合一」することが最高度の幸福であること、第八章では天国の目的を神との「合一」であることを示した。そして高橋氏は、結論において、ルイスの憧れの概念からルイス神学の核心を「手段」—「目的」—「合一」なのではないかと提示した。この考えは、ルイスの神学的研究における新たな問いかけであり、なおかつルイス研究の進展に寄与するものである。

以上、本論文はいくつかの問題点も見受けられるが、ルイスの神学的言説を体系化し、なおかつそこからルイス神学を「手段」—「目的」—「合一」として提示した労作であり、ルイス研究の新たな境地を切り開くものである。

よって本論文は、博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

平成28年1月28日